

おもな参考文献

- 1) 須藤俊男 1953: 粘土鉱物 岩波全書
- 2) 日本分析化学会編 1957: 土壌および肥料分析 分析化学講座9—C
- 3) 平野四蔵 1961: 工業分析化学実験 共立出版
- 4) 渡辺 裕 1961: 粘土の塩基置換容量測定法 粘土科学 1—1
- 5) 藤井紀之・高橋 博 1963: 酸性白土とベントナイト 地質ニュース No. 102
- 6) 加藤忠蔵 1964: モンモリロナイトの陽イオン交換における問題点 粘土科学4—1
- 7) 日本粘土学会編: 粘土ハンドブック 技報堂

第2表 モンモリロナイト質粘土のCECおよび交換性陽イオン測定例

産 地	山形県水沢	〃	〃	
試 料 名	(1)凝灰質頁岩	(2)凝 灰 岩	(3)礫混り凝灰岩	
交 換 性 陽 イ オン	Ca ²⁺	12.2	28.5	25.3
	Mg ²⁺	33.3	32.3	34.9
	K ⁺	0.9	1.0	0.9
	Na ⁺	2.2	2.0	1.4
meq/100g	Total	48.6	63.8	62.5
CECmeq/100g		57.9	65.4	74.2
pH (懸濁液)		5.0	6.0	4.7

(Schollenberger 法による)

アメリカに最初のTectonophysics研究 センター誕生 大学院学生を募集中

星 野 一 男

地質ニュース 139 140号で紹介した Handin 博士がシェル石油開発研究所から構造地質の精鋭を引きつけて tectonophysics 研究センターをテキサス A&M 大学内に創設することになり センターの大学院学生(奨学金つき)募集の案内が筆者のところに来ている。

アメリカで tectonophysics の名を冠した まとまった研究所が作られたのはこれが初めてで大学の案内と Handin 博士からの手紙によると地殻変形に関する包括的研究を目的とし 学生はもっぱら修士 および博士コースの大学院学生を対象にするという。 研究の中心はいわゆる tectonophysics のなかでも 構造解析と地震学におかれるよし。 テキサス A&M 大学はヒューストンとダラスの間にある College Station という静かな大学町にあり 地球物理 石油地質方面では古くから著名な特色ある大学である。 Handin 博士といっしょに移った人は Friedman, Sowers, Stearns 等で Heard, Carter をのぞきシェルの構造地質研究室のほとんどの人がこのセンターに移ったことになる。

温厚な学究 Handin 博士を所長としたこの新センターの設立のニュースは Rock Mechanics が地質・地球物理の分野でも完全に創成期を脱し独立した1新部門として1人立ちを始めたことを告げるもので朗報といえよう。

博士は手紙の中でこの新分野に志す日本の学生を歓迎するといってきた。 ただし書きがあり 聴講に十分な英語力をもっているならばという唯一の条件がついている。 おそらく 博士はかつて接触した日本人の貧困な英語をおもいだしたのであろう。 しかし 語学の点は日本でいくらやっても 限界があるものであるし 基本的覚悟さえしっかりしていれば 道はおのずから開けるものである。

詳細は 下記へ直接連絡して下さい。

東京都新宿区河田町8

地質調査所 燃料部 石油課

星 野 一 男

Tel (03) 341-7131